

シラーの美学に於ける「苦悩」の意味について

大 田 哲 夫

Über das „Leiden“ in der Ästhetik Schillers

TETUO OTA

此の小稿に於ては、シラーの関心とそのテキストに従って、「崇高」das Erhabene に関する諸問題を摘要しながら、「苦悩」das Leiden の意味を考察する。

美的範疇としての崇高は、シラーの美学に於ても、基本的な美的範疇と見做されている。周知の如く、フォルケルトその他のドイツ近代美学が確立しようとしたものは、美的対象と美的観照の関連を範疇論的に整理する事であり、その労作が報いた所の物は精緻な範疇論の体系であって、仮令美学研究の方法論の主流が現代これと異った傾向におかれているとしても、斯の範疇論的な方法は、古典的な、特にカント＝ゲーテ時代の美学的思考法を顧量する場合に不可欠のものを提供している。

例えば、「悲壮＝悲劇美」das Tragische を一つの美的範疇と観る時、そこに内包される美的性格は崇高に対して如何なる関係をもつものであるか。或はまた、別に「芸術性」一般 das Künstlerische überhaupt という概念を設定して、これと上の二つとを関係せしめるには如何なる考え方をすればよいのか。若し純粹規定的に考察すれば、悲壮は崇高の詩的表現に過ぎないか、或は後者が現わす所の非人間的＝自然的契機以外のものを単に人間的生の側面に反映させる一種の派生的なものに過ぎないかとも考えられる。斯うしてみると、芸術性一般の形式性が此の二者と直接的に関連する根拠も見出し難くなるのである。シラーは、後に述べる如く、悲劇形式に対しては凡ゆる文芸形式に優先する性格を与えようとしたが、その根拠の一つは、悲劇形式が美的価値の基本的な範疇によって規定されるという一般的な思想に源流するもので、而も彼が崇高を以て悲劇作品の完成に結びつけた事は、即ちこれを美的なものの基本的範疇と認めた事に通じるものではないであろうか。

シラーはその「詩的真理」論の展開に当って、感動＝詩的目的の達成は歴史的継起＝自然的真理の止揚によるこれとの調和であるとして、ここに或る種の心理的契機を変質的に導入しながら悲劇形式の本質的性格を条件づけてゆく。理論的に観て、美的表象とその表象動機＝美的内容が一致する時にのみ、美的真実の獲得が為されるのであるが、その際美的対象は完全な主観的合目的性を保持し、且つ対象に於ける因果関係の結合は完全な全体性につながっていない

ればならない。随って、一つの美的対象が表象主体を刺戟する場合、それが、潑刺とした現在の持続性を保持していればいる程その刺戟は強大となる。また、これが付帶的偶然的なものを排除していればいる程その刺戟は直接的となり、それ自体の完全性が表象の純粋性を更に著しくするであろう。斯の意味に於て、美的關係にあっては、所与の或る種の加工が必然的に歴史的＝自然的繼起よりの解放を意味するに至る。

シラーに依れば、悲劇形式は「一つの完全な行為の詩的模倣[※]」であって、そこに於てのみ、表象主体の内的形式が対象との同質的關係を見出し得る根拠が存在すると言う。この完全性概念は種属の人間性との前提的な普遍的共通基盤を準備して、「すべての主観の本性と相調和し、それによって凡ゆる主観的条件と無關係であるかとも思われる厳密な普遍性と必然性^{※※}」を齎^{※※※}すものである。この時、所与はすべて「表象のうちに遺漏なきものとされてあり」、観照に於ける類似性の発見は容易ならしめられるであろう。斯の同質的關係づけに基づく詩的真理は自然の加工によるその廃棄を意味するものではあるが、却ってその加工自体によって自然との調和も結果され得る。何となれば、此の事によって自然のもつ偶然的なものは廃棄されて、完全な全体性の中で必然的な諸規定のもとに綜合されるからである。

シラーは美的対象に対する斯の様な完全性の要求の中で、個体 Individuen としてではなく種属 Gattung としての人間の関心を印象づける一方、自然的必然性という否定的契機が形づく[※]る所の人間の行為の印象をも評価する。ここに「苦惱」das Leiden の美的契機が問題となってくる。

対象の美的価値を決定する為に、先ず若干の客観的な美的範疇を措定し、特定の範疇と或る芸術的所与の内的結合度に従ってこの決定を行なう事は或は意義を認め得る事かも知れない。然し、夫々の美的範疇に対応する夫々の芸術形式を比量して、形式それ自体の間に客観的な価値順位を決定する事は全く無意義であろう。芸術形式の評価は精神史と民族文化の各段階に対応しているからである。シラーが崇高性範疇にその関心を集中して、他に認められ得た、例えば、滑稽性範疇の様なものを殆ど度外視し得たのも、彼がおかれた精神史の一段階、随って民族文化[※]的な特性が彼の個性と強力に結合した結果である事は論を俟つ迄もない。シラーが悲劇形式を尊重したのは、この形式が人間の種属としての性格に及ぼす直接的効果を認識したからであり、この事が人間の性格完成というドイツ古典主義時代^{※※※※}の精神史的徴候と一致しているのは云う迄もない事である。

彼は悲劇形式の性格を明確に規定して、「悲劇の目的たるや感動 die Rührung であり、その形式たるや苦惱を結果とする或る行為の模倣である^{※※※※}」としている。悲劇形式の本質を形づくる

※ „Nachahmung einer vollständigen Handlung” S. W. Bd. 12, S. 174. „dichterische Nachahmung einer zusammenhängenden Reihe von Begebenheiten (einer vollständigen Handlung)” S. W. Bd. 12, S. 173.

※※ S. W. Bd. 12, S. 170.

※※※ A. a. O.

※※※※ 『美的教育書翰』では、これに関連して「人間が大きさの単一性 eine Größen-Einheit から理念の単一性 eine Ideen-Einheit へ昇る」という表現が示されている。S. W. Bd. 12, S. 45.

※※※※※ S. W. Bd. 11, S. 178.

所のものは直接的に苦悩の表象を齎らす所のものであって、若し此の点が曖昧となれば当然劇はその形式を欠く事となろう。例えば、シラーによれば、多くの *Trauerspiel* (悲劇)は *Tragödie* (悲劇) とは種を異にする。何となれば、前者は「高い詩的美に充ちているにも拘らず、」^{*}「悲劇的形式によって悲劇 *Tragödie* の目的とは別のそれを達成 *erreichen* しているからである。」^{*} 悲劇形式は飽く迄も全体的感動の動機乃至原因でなければならない。シラーが悲劇形式を現在の体系的行為の模倣と見倣すのも当に此の点にあって、他の詩芸術形式、例えば、一般的な説話 *Erzählung* や記述 *Beschreibung* の形式は勿論、抒情詩 *die lyrischen Dichtungen*、哀歌 *Elegie*、頌歌 *Ode* 等も、情念 *Gemüt* の固定された状態か或は特殊的(即ち非普遍的非全体的)条件の下での「詩人の情念の特性」*Gemütsbeschaffenheit des Dichters* を模倣するに過ぎないが故に、^{***} 観照を通して直接性格に影響を与えるものではない。

さて、シラーに依れば、悲劇形式は苦悩の表象の原因となる或る行為の模倣でなければならないが故に、^{***} 結局此の芸術形式が強調すべきものは「吾人に苦悩の状態に於ける人間を示す、或る行為の模倣」である。然しながら、此の事は、シラー自身が悲劇形式の充足を単なる苦悩の描写そのものにおいているという事を意味するものでは決してない。シラーに依れば、芸術の究極の目的は苦悩の描写ではなく、超感性的なものの描写、即ち、感動 *Affekt* の状態に於ける自然法則 *Naturgesetz* からの道徳的独立 *moralische Independenz* を感性化 *versinnlichen* する事である。^{***} 苦悩はその観照を通して主観に「激情」*das Pathetische* 或は「パトス」*das Pathos* を与える事によって、^{***} 観照そのものを理性の反映の中に齎らす所の動機である。それ故、ここに提起されている苦悩は、単に心理的に解決されるべき性格のものではなく、究極的に主観に影響を与えて、そこに一種の自律的範疇を触発するという動機性格をもった概念となる。

随って、シラーの美学に於ては、苦悩はアリストテレスやレッシングの意味に於けるカタルシスの直接的動機とはなり難い。レッシングに於ては、周知の如く、その合理主義的な立場からして未だ美的対象に対して十分な自律性を認めるに至っておらず、苦悩を形而上学的な観点から普遍的な鎮静効果の動機としてしか把握していない。シラーにあっては、苦悩は斯の様な非美的乃至心理的效果の動機ではなく、性格の効果をもったもの、即ち美的意味に於ける芸術の自律性そのものに関係するものであって、美的対象の本来的な全体的完結性の契機として、主観に対して「美的」効果を与えるものである。この点に於て、シラーの美学が意図する所のものは明らかにカントとゲーテが意企するものと共通している。シラーに於ては、随って、苦悩は悲劇形象化の方法論を動機づけるものでもある。

それ故、美的意味に於ける苦悩は単に感性的側面にのみ扱えられるべきものではなく、寧ろ理性的な側面に於て強調されるべきものである。それは一般的に古典主義的自由の観念と同一

※ S. W. Bd. 11, S. 179.

※※ S. W. Bd. 11 S. 174.

※※※ S. W. Bd. 11, S. 177.

※※※※ S. W. Bd. 11, S. 246.

の基盤に立った発想であって、理性的合目的性の感性的表現となるべきもので、シラーが屡々謳い上げる所の「心情の自由」die Gemütsfreiheit や「抵抗の能力」ein Vermögen des Widerstandes を証明する所のものである^{*}。自然が示す所の反目的性に対する斯の抵抗の衝動は、ドイツ古典主義者に於ては云わば本源的なもので、自然的偉大に対して無限の圧倒感 Hingenommensein を示したロマン主義者との心情的対立を最も明確にするものでもあろう。

悲劇形式に於ける苦悩の表現は、それ故、それ自体によって美的客体の価値を決定するものではなく、苦悩が触発する所のものが如何にして美的体験の形式に参与するかによって価値づけられなければならない。端的に云えば、苦悩はパトス＝激情の根源であるという限りに於てのみ価値を有する。これは一面では悲劇形式に内在する葛藤 Konflikt から自然に流出するものであると共に、他面主観にとっては本来的な自発的原理と結合した一種の選択的原理としての性格をも有する。シラーにあっては苦悩は明らかに主観の自意識が受けとるべき選択の対象である。特に「行動の崇高」das Erhabene der Handlung に於ては「人間の苦悩は彼の道徳的特性 moralische Beschaffenheit に影響をもたぬのみならず、却ってその道徳的性格 moralischer Charakter の所産 Werk^{***}」であると見做されるのである。

然しながら、苦悩がそのみに停滞して、主観の積極的な発展に関与しない時、そこに生ずるのは単なる「恐怖」das Furchtbare と「卑俗」die gemeine Seele のみである。苦悩を直観して、破滅の自律的選択的な獲得が為される時、初めて対象は美的となる事が出来、その静観を通して主観の純粹感情を触発する事によって美的体験を完成させ得るのである。つまり、本来的には、苦悩は自然的契機に基づくもの故感性に於ける反目的表象であるが、或る悲劇的段階に於ては、主観の理性的自律性が敢てこれを自己にとっての合目的性として選択する事により一応感性＝自然に対する自己の自由を証明するという関連が考えられるのである。それと同時に、その選択そのものが作用に対する反作用となって、感性的不快と理性的不快を相殺的に平衡化せしめ、そこに美的対象の静観による主観と客観との美的内面形式の完成も、おのずから可能となるのである。

勿論、苦悩が美的関係を成立せしめる過程については、客観的に悲劇的葛藤論から出発して、イデーの純粹内容の獲得に至る過程を重ね合わせて論ずる事も出来るであろう。即ち、初めに悲劇的主体をイデーの具現者と規定した上で、それと悲劇過程に於ける現実性との矛盾葛藤から生ずる所の苦悩、或は悲劇主体に於ける生とイデーの矛盾的結合に基づく苦悩が、その主体の没落 Untergang によって同時に解消し、これと共にイデーにとっての対立的契機が分解してイデーの純粹性のみが印象づけられ、そのイデーの純粹内容の直観によって苦悩を宥和 versöhnen せしめる所に、体験的な美的効果を論ずるという事も可能である。慥かにシラーに於ても苦悩の表象は、間接的にしろ、イデーの表象と結合し、また悲劇的に解消させられるべ

※ S. W. Bd. 11 S. 246.

※※ S. W. Bd. 11 S. 264.

※※※ S. W. Bd. 11 S. 261.

きものでもある。何となれば、苦悩の残存は主観にとっては救い難い苦痛となって、心情の自由を圧迫して卑俗な熱情を齎すにすぎないか、または感性の陶醉 *Berausung* を刺戟して凡そ高貴とは逆のものを産み出すにちがいないからである。^{*}

それ故、ここでは、苦悩の現存にも拘らず、その痕跡を殆ど見せない、随って「或る程度自由に見える」^{※※}様な制作上の取扱いが必要である。苦悩を通して超感性的なものへの指向が示される事によって、初めて「パトスと悲劇的力 *die tragische Kraft*」が生ずるとされるのである。^{※※※}即ち、自発的原理に従属する超感性的抵抗の能力が対象とする所のものが、結局シラーに於ける悲劇的苦悩の評価を決定するのであるが、その際の心理的感動としての熱情 *Passion* はその源流である主観の自発的原理＝理性の合目的性をすらも薄弱ならしめる様な現れ方をしない限り、パトス或は激情の資格を有するには至れない。（激情については、シラーはのちのフォルケルト等の感情移入美学とは可成り異った観方をしている。シラーが言おうとした事は、要するに、客体に対する主観の判断の仕方の基準化という事であるが、同時に重要な事は、のちに述べる如く、斯の判断の主観性が主観に与える所の性格的な効果である。）

苦悩は、シラーにあっては、全自然的＝感性的震撼を種的人間的性格の解放へ転回せしめる原理を意味するとすれば、それは如何なる関連に於て、激情或は崇高の動機となるのか。

シラーは、「決して苦悩そのもの *das Leiden an sich* でなく、苦悩に対する抵抗のみこそ *pathetisch* である」^{※※※※}として、苦悩が激情に対して有する関係を規定している。即ち、激情は単なる感情の昂揚ではなく、随って感性的側面から誘発されるものではなく、却って感性そのものを対象とした抵抗的感情である。苦悩が、シラーに於ては、理性の感性に対する抵抗の中から誘発されるものであるとすれば、当然の事ながら、感動は理性に関係したものでなければならないが、その苦悩に基づく所の「感動 *die Rührung* は、苦悩を単に苦痛たらしめるものであってはならない。若し理性の感性的暴力に対する抵抗が余りにも強大となれば、そこには単なる道徳的尊厳か或は可成りの程度非美的要素を荷せられた端正が現象するに過ぎず、古典主義的な立場から観る時、結局そこには理性の自己矛盾が露呈する事になるにすぎない。また、悲劇的潜在力を絶えず活発ならしめる為にも、描写に於て、苦悩の印象は周期的に中断交替しながら増大更新させられる必要がある。而も、その苦悩を感性の領域に於いて解消せしめない為には、（何となれば、若しそうなれば、苦悩は単なる悲嘆に貶価されて、美的価値への参加は不可能となるからであるが、）苦悩をして理性的規定性＝義務表象の結果たらしめ、主観内に留保させる必要が生ずるであろう。斯の関連に於ける精神の自律性を示すものが激情である。

斯くして、激情が単なる感性の方向性ではない事が明示される。却って、激情は、シラーにあっては、より多く理性＝精神的自発性と関係を有し、悲劇的力への共感、即ち悲劇的感動を

※ S. W. Bd. 11, S. 249 ff.

※※ S. W. Bd. 11, S. 255.

※※※ S. W. Bd. 11, S. 256.

※※※※ S. W. Bd. 11, S. 249 ff.

※※※※※ S. W. Bd. 11, S. 252.

決定するのである。即ち、これは単なる心理的経過ではなく、当に美的な感動と結合するが故に、その延長に於て崇高に到達すべき動機を形成するのである。それは一面では崇高な意識の内容ではあるが、より基本的には、寧ろ崇高の前提となる内面的動機である。随って、フォルケルトが言う如く、激情とは崇高がこれを以てそれ自体を持続せしめる為の努力の形式を意味するものではないと考えられるのである。シラーにあっては、激情は超感性的な自我の感動そのものに関わるものであって、美的意味を有する対象の或る内面的大きさと接触して、主観の内面的自由の意識、即ち崇高な精神的態度を産み出すべきものである。

然しながら、シラーに於ても、激情が崇高と並ぶ美的態度の一範疇でない事は言う迄もない。シラーはこれを殆んどパトスの同義概念として用いているが、その際彼はパトスそれ自身は感性との闘争、即ち苦悩から生ずるが故に、本来的に感性とは異った前提に立つ事から、結局これは理性の理念 *Ideen der Vernunft*[※] であるとする。そして、理念はそれ自体直観と照応するものであるが故に、パトスは描写の対象ではあり得ない。芸術的描写の根柢は感動であるが、此の場合の感動は理性の何らかの仕方による表現でなければならない。シラーはこれを説いて、苦悩の現存にも拘らず描写に於ては苦悩の痕跡が殆んど示されない様に、つまり或程度自由に見える様に為される時、描写はより激情的、パトスはより崇高的であると言っている。^{※※} 我々は此の言葉を如何様に理解すべきであろうか。

思うに、言葉本来の意味から観れば、激情は熱情の類似概念である。然しながら、熱情とは本能的感性的な性質を帯びた情緒であって、直接的に理性と関係するものではあり得ない。所が、激情に対しては、従来記述した様に、シラーは明確に形而上学的な概念としてこれを規定している。パトスとの同義性も斯の意味に於て初めて理解され得るのであるが、ここでシラーはパトスの理念性を同じく理念の表現形式としての崇高と同一の基盤に置いて、パトス＝激情の崇高への可能性或はそれとの同質性を考えたものであろうか。何れにしろカントによって範疇論的に基礎づけられた美的体験の内面形式の理論は、シラーによって、その個性の方向に継承せられてゆくのである。

周知の如く、カントは理性 *Vernunft* と使命 *Bestimmung* の自覚の上に立った圧倒的な自然の力の超克の中に崇高の成立根柢を見出して、所謂数学的崇高と力学的崇高とを以て美的意識の内容とした。シラーに於ては道德的範疇としての崇高性 *die Erhabenheit* と美的範疇としての崇高 *das Erhabene* は前提的に区別されている。そこでは、慥かに力学的自然と類似した感性は克服されなければならないが、然しそれは主観の非美的＝純道德的境位を優先的たらしめる様な仕方にて於て為されるべきではない、とされるのである。シラーの美学に於ける苦悩の意義、随って激情の意義も、要するに此の一点に焦結して理解されなければならないであろう。尤も、カントの場合も、主体の態度 *Stellung* 如何によって道德的動機が条件的に無意識のうちに美的内容に変形する事は考えられている様であるが、そこにはそれら二原理がイデーとい

※ S. W. Bd. 11, S. 253.

※※ S. W. Bd. 11, S. 256.

う形而上学的原理の中で思弁的に同一化されているという前提に立てば、そして此の前提に関する限り、シラーは勿論古典主義以降の多くのドイツ美学は共通の基盤をもつと言えるであろうが、問題はその態度を美的なものと道徳的なものとの何れの方を優先させるかによって個性の夫々の方向が展開され得るのである。

一般的に言えば、理性的動機が美的感情を成立せしめる為には、その非美的要素が十分に美的範疇として消化されていなければならない。そして美的なものは道徳的压力が人間的地上的欲求を抑圧し尽さないという心理的境位の中にこそ成立すべきものである。シラーにとって、自由は自証的に人間的な存在それ自体の中に在るもの故、美的なものの中に発現された自由のみが真の自由となる。此の点に、シラーが悲劇形式の形象化的本質を崇高に結びつける所の個性的思想的根柢が認められるのであるが、この思想的展開の方向には必然的に古典主義的な人間教養の目標が設定されるのである。シラーに依れば、自由とは常に力学的自然から離れている状態を意味する。即ち、自然の圧倒的な威力或は感性の本能的衝動が主体に及ぶ以前に、これを主体自身の自発的行為へと廃棄する事、つまり、行為に関する必然性を概念に於て偶然化する事である。その可能性の基礎は人間の本性それ自体に内在する美的能力にある。シラーの古典主義的楽観観をして言わしめれば、「幸いにも……人間の本性には美的傾向があって、これが或る感性的対象に喚起され、その感情 *Gefühl* の純化を通して心情の斯の様な理想主義的昂揚に迄陶冶され得るのである。」ここに問題となる自由とは、即ち、対象の同一性に対する主体の二面的な関わり方であって、その際、対象に対する主体の二つの関心、つまり、理性的合目的性と感性的合目的性を対象に即して矛盾的に同一化する事を意味するのである。

此の自由への精神的過程が崇高が成立する過程と重なるのである。厳密に言えば、崇高な対象と主体に於ける崇高とは区別して考察しなければならないのであるが、シラーにあっては、美的体験或は美的客体と美的主体が同時的に関与する所の美的内面形式に於ては、斯の様な崇高の区別は意味を失う。つまり、崇高な対象が誘発するものは主体の内的絶対性の自覚、従って主観的には自然的必然性の限界の自覚であり、また、崇高の意識が齎すものは主体に於ける理性と感性の不一致に基づく所の限界の自覚であって、これを心理的バネとなし、苦悩を決定的動沌や機として自己の無限定化を量る事である。勿論、シラーも自然に於ける超悟性的な混その量的空間的偉大さが示す所の崇高の印象には言及しており、一般的にも、崇高の美的本質は自然美的な契機が美的内容を構成する契機となって示される所の特殊な心的効果に基礎を置く事は言う迄もない。外的偉大の圧倒的な印象が感性的直観的把握の限界を超える時も、勿論、直接心情の自由を一部奪うことによって却って内面的契機を触発発展せしめて美的価値体験の形相に特殊な異態作用 *Modifikation* を加えてそこに崇高の条件を成立させ得るのである。崇高の「感情」とは、シラーの場合、対象の総括的把握力の欠除感と感性に対する圧倒的

※ S. W. Bd. 12, S. 266.

※※ A. a. O.

※※※ S. W. Bd. 12, S. 275f.

※※※※ S. W. Bd. 11, S. 260.

なものを克服する精神的優越感との混合感情を意味しており、その混合感情こそ悲劇的苦悩の[※]特徴を示すもので、理性的反目的性表象がその反目的性それ自体との和解の中で合目的性を獲得する時、苦悩は崇高に転換され得るとされるのである。

そして激情は此の苦悩の中に成立する「一種の人工的不幸」ein künstliches Unglückであり、「運命の種痘」Inokulation des unvermeidlichen Schicksals^{※※}であって、感性的超悟性的現象を理性的に統一しようとして自律的に「武装した」in voller Rüstung^{※※※}主体をこれが襲う時、現実の不幸は恰も人工のものの如く取扱かわれ、現実の苦悩は崇高の中に溶解するに至るとされるのである。

(昭和48年9月29日受理)

※ S. W. Bd. 11, S. 144.

※※ S. W. Bd. 12, S. 521.

※※※ S. W. Bd. 12, S. 279.

引用テキスト：Schillers Sämtliche Werke, Säkular-Ausg. Bd. 11, Bd. 12. (Cotta'sche Buchhdl.)

参照テキスト：Schillers Sämtliche Werke, Meyers Klassiker-Ausg. Bd. 7.